

延原武春さんの近況

二十七回生 萩原 直大

延原武春氏は相変わらず精力的に演奏活動を展開されていて、お陰で私も東京近郊に居ながら、テレマン協会の演奏会はもとより、指揮者延原氏を客席から毎月のように仰ぎ見ることができました。

12月・東京文化会館、1月・同場、2月・杉並公会堂、3月・横浜・神奈川県民ホール（震災の影響で中止）、4月・東京文化会館、7月・同場

全て延原氏が指揮をとりましたが、これからははいよ氏のオーボエが聴けることになりました。

そのような中、今は伊勢に戻られた林裕三氏から次のような報告がありました。

三重県文化会館大ホールで三月十七日にテレマン協会の演奏会が開かれ、久々に楽屋を訪れ歓談されたというものです。楽屋では延原氏の他、フォルテピアノの貴公子高田泰治氏やテレマン協会新代表者の中野順哉氏（チエンバロ奏者 中野振一郎氏の弟）とも会われたそうです。その時の話・写真を次頁に掲載します。

延原氏の活躍の場は日本に限ったことではありませんが（ドイツが主）、やはり本場は大阪。いずみホールを中心にザ・シンホニーホール、大阪倶楽部と目白押し。その合間を縫って、東日本大震災追悼コンサートもトリック夙川教会聖堂で実施。その他、千里山会の皆様には懐かしいグレース幼稚園（会誌第9号 千里山幼稚園物語（二）参照）でも毎年演奏を続けておられます。

また一方、本年5月28日 茨木市市民総合センターでは、「音楽絵巻 創作講談と室内楽」という不思議な出会いが催されました。茨木と講談と言えば片桐且元。チエンバロを主とした室内管弦楽と大阪城落城で活躍した片桐且元がどのように結び付くのか？ 聞いてみたかったものです。

氏はテレマン協会の代表を降り、これからはオーボエの演奏を時折復活させるようです。

代表交代の挨拶文をお読みください。（次々頁参照）最後に今年の1月、日経新聞の朝刊「文化」欄に、「作曲当時の音の世界」と題してサイモン・スタンディジ氏の文章が載っており、そこにテレマンとの長い付き合いが語られていましたので掲載させていただきます。

テレマン協会 延原武春 三重に来る！

二十七回生 林 裕三

私達二十七回生と同期のテレマン協会の代表であった延原武春君が三重県に来てくれると言うこととで同期の萩原君に連絡先を聞いて、早速三月十七日三重県文化ホールの楽屋を演奏前に訪ねた。黒いコートに長い真赤なマフラーをしてサングラスをつけて出てきたときはやはり芸術家だと驚嘆した。コートを脱ぎサングラスを外すと子供時代の武春ちゃんだ。本日のフォルテピアノの演奏者 高田泰治君や新代表である中野順哉氏ともお会い出来た。テレマンの演奏会は楽しさが狙いと言う。それは武春ちゃんの話術に負うところも多いが、楽器のこと、曲目についても解説してくれ、特に演奏者にインタビューすると客席から笑い声が起こる。演奏後客を舞台上げて身近にピアノを見せてくれるサービスもあり、確かに楽しい演奏会であった。



テレマン協会新代表中野順哉氏
と 延原武春氏



延原武春氏と筆者

文化

英国出身の私が毎年大坂を訪れるようになって20年が過ぎた。日本でもバツハやウィヴァルディなど18世紀の音楽を専門に演奏してきた草分けの団体、延原武春さん率いる日本テレマン協会も、18世紀以前の音楽を作曲詩の仕様の楽器（リトード楽器）で弾くのを専門にしている。今年も70歳になる私にとって日本テレマン協会の演奏は人生の大事な財産だ。

拍手・歓声、40年が経ち、初めての訪日は1967年。シモン・ゴルトベルクが創立し、指揮者を務めたオランダ室内管弦楽団の第1ヴァイオリン奏者として、現在連日が増えた。



コレギウム・ムジクム・テレマンでコンサートマスターを務める筆者＝日本テレマン協会提供

頃、チェンバロ奏者のケネス・パーバーに出会い、バツハなどと一緒に演奏するうちに、古楽の様式が身についた。1968年、ボグワットのエンシェント室内管弦とオーストラリア、日本、香港を回る大規模なツアーを行った際、東京でモーツァルトの「レクイエム」の楽法も指導してくれな

私は1960年以前の小編成の音楽に早くから興味を覚え、ごく自然の成り行きでリトード楽器に行き着いた。ニューヨークのユリアード音楽院でイン・ガラシア教授に師事していた

の交響曲第9番も演奏した。モツァルトとリトードの楽器は、欧州にもあまり変わらない。右手を丹念に直しながら、古楽にふさわしい音符の立ち上げ方を教える。おいて、困難やキャリアは関係ない。大阪でも同じ方法論で歴代のCMTメンパーと接してきた。私は昨年、ドイツ・マクセル・シュタインマン協会からテレマン・メダルを授けられた。その賞金で、私の合奏団「コレギウム・ムジクム」でテレマンの知られざる作品を録音する。「テレマン」とは縁が切れないのである。（パロクックヴァイオリン奏者）

作曲当時の音世界へ

◇古楽器でバツハなど演奏 大阪の楽団を20年指導 ◆サイモン・スタンデイジ



サイモン・スタンデイジ

2011年1月24日 日経新聞 朝刊

皆様へ

今年は2011年。21世紀も10年目を迎え、これからの本格的な「新世紀」の幕開けとなってゆくのではないかと考えています。そんなことをつらつらと考えているうちに、自分たち演奏家が立っている「位置」について、少なからず不安も感じています。

「テレマンは関西文化の将来にどう関わってゆくのか」—— 社会・文化に対して明確なビジョンとオピニオンを構築してゆくことが、21世紀にはより深く、より本格的に求められるのではないのでしょうか。

私がかねがね日本テレマン協会は音楽の団体である以前に文化の団体であると考えてきました。そしてそのリーダーとして48年間代表を務めてきました。しかし今、その役割は私人では少し「手薄」なのではないかと実感しております。

代表代行の中野順哉は環境問題や地域の文化振興、上方講談とのコラボレーションなど、社会性・土着性・創造性という様々な視点で「テレマンの存在意義」を証明してきました。彼と共に「21世紀の演奏団体のあるべき姿」について、もっとひざ詰めで考えて行きたい——それが今の私の偽らざる思いでもあります。

この新世紀の幕開けの年。1月1日をもって中野順哉を日本テレマン協会の代表とすることにしました。もちろん私は今まで通り日本テレマン協会のリーダーであり、音楽監督であり、何も変わることはありません。ただ、彼との二人三脚でしばし「21世紀」を歩んでみたいと思っています。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

延原 武春

2011年2月吉日

日本テレマン協会

会長・音楽監督 延原 武春
代表 中野 順哉



近畿1400万人の命を支える琵琶湖の水。このお手紙には水質浄化のために刈り取られた「西の湖」の葦（よし）を使用しています。お手紙一部で琵琶湖に水、約200リットルが浄化されたこととなります。この紙に関するお問い合わせは06(6314)3772 梓ビーアール株式会社まで。